

## カシミール史料におけるミールザー・ハイダル

### Mirzā Ḥaydar as Depicted in Sources from Kashmir

小倉智史

Satoshi OGURA

**Abstract** The Moġūl military chief Mirzā Muḥammad Ḥaydar Duġlāt first made a campaign in Kashmir in the late autumn of 1532 CE as a chief commander of Sulṭān Saʿīd Ḥān of the Moġūlistān Khanate, and stayed in the valley until that following spring. Seven years later, in 1540, Mirzā Ḥaydar set forth again from Lahore to conquer Kashmir in response to an invitation by Kashmiri indigenous potentates. After taking control in early 1541, he spent his last ten years in the valley. Mirzā Ḥaydar's first campaign and days of de facto rule with a puppet sulṭān were recorded by four Sanskrit and Persian sources from Kashmir, which were composed beginning in the early sixteenth century until the first quarter of the seventeenth century. This paper provides a Japanese translation of these four sources from Kashmir that refer to Mirzā Ḥaydar's activity in the valley, demonstrating new findings that have not been discussed in previous studies, as follows: 1) the *Rājataranġinī* of Śuka contributes to restoring the route in Kashmir that the Moġūls took over during the 1532-33 campaign, and identifying the location where the Moġūls and Kashmiri troops battled. 2) The Appendix B and the *Bahārīstan-i Šāhī* describe Mirzā Ḥaydar's unstable sovereignty over indigenous potentates in the early 1540s. In addition, the latter source further narrates an episode of his compromising attitude toward the Nūrbaḥšīyya owing to his unstable sovereignty. 3) The *Tārīḫ-i Kašmīr* of Sayyid 'Alī and the *Bahārīstan-i Šāhī* both provided the date of Mirzā Ḥaydar's death: Dū al-Qa'da 7 or 8, 957 Hijri/November 17 or 18, 1550. This date is about one year earlier than the date of his death that has been generally accepted in previous studies as 958/1551.

**Keywords** Mirzā Ḥaydar (ミールザー・ハイダル), Kashmir (カシミール), the Moġūls (モグール), the Šāhmīrids (シャーミール朝), the Nūrbaḥšīyya (ヌールバフシーヤ)

## はじめに

16世紀前半に中央アジア・アフガニスタン・北インドを駆け抜けたモグールの貴族、ミールザー・ハイダル (Mirzā Muḥammad Ḥaydar Duġlāt)<sup>1)</sup> が最後に辿り着いた場所は、「薔薇水が如き川が方々を流れる」[TR: 620] 風光明媚な谷、カシミールだった。ミールザー・ハイダルは1532-33年のスルターン・サイード・ハーン (Saʿīd Ḥān r. 1514-33) のチ

1) 後で見ると、カシミール史料から得られる情報は、ミールザー・ハイダルの没年に関する定説に疑義を差し挟むものであるため、ここではミールザー・ハイダルの生没年を記さない。

ベット遠征に同行し、32年の晩秋に初めてカシミール溪谷に侵入、翌33年春まで同地に滞在した。それから7年後の1540年、モグーリスターン・ハーン国を離れてムガル帝国2代君主フマーユーン (Humāyūn r. 1530-40, 55-56) に仕えていたミールザー・ハイダルは、フマーユーンともどもスール朝のシェール・シャー (Šīr Šāh r. 1539-45) にカナウジの戦いで敗北を喫して、ラホールに逃れることを余儀なくされた。その折に宮廷に参じたアブダール・マグリ (Abdāl Māgrī d. 1541) らカシミール在地有力者の要請を受けて、再びカシミールに侵入する。そして翌年に同地の支配権を掌握し、シャーミール朝<sup>2)</sup>のナズク・シャー (Nāzuk Šāh 2<sup>nd</sup> r. 1540-51)<sup>3)</sup> を傀儡スルターンとして、およそ10年間にわたってカシミールを実質的に支配した<sup>4)</sup>。

それまで旅に次ぐ旅の人生を送っていたミールザー・ハイダルは、カシミールの地を思いのほか気に入っていたようであり、同地で完成させた史書『ラシード史 (以下 TR)』<sup>5)</sup> の中で、カシミールの風景や様々な驚異などについて、感嘆を交えて語っている。最終的にミールザー・ハイダルはカシミールの在地有力者たちの反乱に対処する中で斃れ、遺体はスリナガル市内にあるマザーリ・サラティーンに葬られた。

ところで、自身の回想録を含む TR 第2部の完成から死に至るまでのミールザー・ハイダルの動向については、当然のことながら TR 以外の史料の記述に拠るほかない。まず、1885年にカシミールのムスリム王朝下で発行された銀貨についての短い論攷を発表した Charles James Rodgers が、デカンのアーデイル・シャーヒー朝に仕えたムスリム史家フィリシタ (Muḥammad Qāsim Hindūšāh Astarābādī “Firišta,” d. 1620) の『イブラーヒームの薔薇園 (以下 GI)』(1606-07以降完成) のカシミール史の章の英訳を、この論攷の付録に加えた

- 2) シャーミールという人物によって開かれたカシミールのムスリム地方王朝 (1339-1561)。ミールザー・ハイダルが没してから約10年後の1561年に、最後のスルターンであるハビーブ・シャーが、在地有力氏族のチャク氏に属するガーズイー・ハーンによって廃されて滅亡した。
- 3) 『ラシード史』はこの君主の名前をスルターン・ナーディルとしている [TR: 626]。一方シュカはこの君主を Nājoka という名前で呼んでおり [SRT: 2. 11]、これは Nāzuk に対応すると考えられる。TSA も Nāzuk という名前を採用しているが [TSA: 36]、この君主に帰される Nadir と打刻された貨幣も発見されており [Kak 1932: 136]、ひとりの君主が帯びていた2つの名前がどのような関係にあったのかははっきりしない。さしあたり本稿ではナズク・シャーを採用する。
- 4) ミールザー・ハイダルははじめスリナガルに拠点を置き、950/1543-44年にスリナガルからやや北のアールドロータコータに移動した。ペルシア語史料中に ANDRKWT という綴りで頻出するこの地名について、Ross はその場所を特定できなかったと述べているが [Ross 1898: 2. 485, n. 2]、近年 Slaje によってサンスクリット史料中のアールドロータコータ (Ārdrotakota) に特定された [Slaje 2014: 316]。アールドロータコータはジェーラム川の左岸、北緯34度13分48秒、東経74度37分49秒に位置する。古くはジャヤーピーダプラと呼ばれており、8世紀から城砦としての機能を有していた [Stein 1900: 2, 479-80]。同座標を Google Map の航空写真で見ると、確かに軍営の跡らしき地形を確認できる。
- 5) まず948年から950年/1541年から43年の間に第2部 (回想録・同時代史) が完成し、次いで952/1545-46年に第1部 (モグーリスターン・ハーン国史) が完成した。翌953年にミールザー・ハイダルは第1部に記述を追加している [問野 2016: 132]。

[Rodgers 1885: 98-139]。のちに Denison Ross が Rodgers の論文からミールザー・ハイダルの統治をまとめた一節を抜粋して TR の英訳に収録したため [Ross 1898: 2, 487-91], GI がミールザー・ハイダルの晩年を伝える史料として知られるところとなった。約 1 世紀を経て、当時アリーガル・ムスリム大学歴史学科の教授だった Mansura Haidar が、様々なペルシア語史書からミールザー・ハイダルに関する記事を抜粋し、その英訳とともに収録した単著を発表した [Haidar 2002]。同書で Haidar は、ムガル帝国やデカン・ムスリム政権下で成立したペルシア語史料<sup>6)</sup>のほか、カシミールのペルシア語地方史 2 作品、ハイダル・マリク (Ḥaydar Malik) 『カシミール史 (以下, THM)』(1620-21 年完成) とナーラーヤン・カウル (Nārāyan Kaul) 『カシミール史 (以下, TNK)』(1710-11 年完成) に含まれている、ミールザー・ハイダルに関する記事を紹介している [Haidar 2002: 130-136]<sup>7)</sup>。本邦では間野英二が TR ほか Haidar 2002 で扱われている、アクバル時代のムガル帝国史料、および GI に基づいて、ミールザー・ハイダルの生涯を年表にまとめている [間野 2016: 124-35]。

Rodgers が訳出した GI のカシミール史の章は、ニザームッディーン・アフマド (Nizām al-Dīn Aḥmad Harawī, d. 1594) の『アクバル諸章 (以下, TA)』(1594 完成) にほぼ依拠しており [TA: 3, 424-506], ミールザー・ハイダルの統治に関する節でフィリシタが追加した情報は僅かである<sup>8)</sup>。史料の成立年代からも, TA とアブル・ファズル (Abū al-Faḍl ibn Šayḥ Mubārak Nāgawrī, d. 1602) の『アクバル・ナーマ (以下, AN)』(1597-98 完成) の 2 つがミールザー・ハイダルのカシミール統治期間に関する、ムガル帝国側のもっとも信頼できる史料になる。しかし、両史料はいずれもミールザー・ハイダルの死後 40 年余りを経て成立した作品であり、執筆された場所もカシミールではないといううらみがある。アブル・ファズルとニザームッディーン・アフマドがカシミールを訪れた際に取材を行い、情報を収集していた可能性はあるが、両者とも情報源を示していないために、詳細は不明である<sup>9)</sup>。

- 
- 6) アミン・アフマド・ラーズイー (Amin Aḥmad Rāzī, 没年不明) 『七気候帯 (以下 HI)』, ザヒールッディーン・バーブル (Zahīr al-Dīn Muḥammad Bābur, d. 1530) 『バーブル・ナーマ (以下 BN)』, グルバダン・ベグム (Gulbadan Begum d. 1603) 『フマーユーン・ナーマ (以下 HN)』, AN, TA, アフマド・タッタウィー (Aḥmad Tattawī, d. 1588) 他『千年史』, アブドゥルカーディル・バダーウーニー ('Abd al-Qādir Badā'ūnī, d. 1615) 『歴史精髓 (以下 MT)』, GI。
- 7) Haidar は THM の作品名を *Tāriḥ-i Salāṭin* ないし *Maḡma' al-Tawāriḥ* としているが、これは誤りで *Tāriḥ-i Kašmīr* という作品名が正しい。彼女がカシミール史料のうち上記 2 作品のみを Haidar 2002 で紹介したのは、おそらくこの 2 作品の写本のみがアリーガル大学マウラーナー・アーザード図書館に所蔵されていたためと思われる。Haidar は THM については Sulaiman Collection no. 657/35 写本を、TNK については University Collection no. 71 写本を利用している。
- 8) GI のカシミール史の章には、冒頭に TR から引用されたヒンドウスターンのウラマーからミールザー・ハイダルに送られたファトワーの写しが挿入されており [GI: 2, 336-37], これは TA にはないフィリシタが追加した記事である。
- 9) AN の第 3 巻である AA と TA それぞれのカシミール史の章は、1538 年の出来事までは『ラージャタランギー』ペルシア語訳に依拠している。しかし、『ラージャタランギー』ペルシア語訳がシュカの『ラージャタランギー』に付せられた続編群の翻訳も含んでいたとは考えにくく、

一方で、TA や AN などムガル帝国の史料や、カシミール地方史である THM の成立以前にも、カシミールではサンスクリット、ペルシア語それぞれで史書が編纂されており、これらカシミール史料<sup>10)</sup>もミールザー・ハイダルに関する情報は含んでいる。これらの史料は成立時期が THM より早いばかりでなく、ミールザー・ハイダルの動向に関して独自の情報を提供するなど、研究上の重要性は高い。例えば筆者は以前、1540 年代にカシミールで編纂されたと考えられる、シュカ (Śuka, ca. 1513-38) の『ラージャタランギニー』に付せられた続編の一つ『断簡 E (以下, E)』<sup>11)</sup> の邦訳を発表した [小倉 2015a: 82-83]。同断簡において、ミールザー・ハイダルにはアヌーシルヴァーンに比される公正な君主であり、また言葉に関する権威でもありと、惜しめない称賛が浴びせられている。彼の実質的なカシミール統治下において、異教徒の中にもミールザー・ハイダルを支持する者がいたことを伺わせる興味深い情報を、この断簡は提供している。

しかし、上述のようにムガル帝国やデカン・ムスリム政権のペルシア語史料は先行研究で参照されてきたものの、カシミール史料はミールザー・ハイダルの生涯を再構成する上で、これまで十分には利用されてこなかった。一つにはサンスクリットがイスラーム史研究者には利用しづらい言語であるという理由があり、今一つにはカシミールのペルシア語史料についても、校訂本が出版されない、されたとしても入手が困難である、などの理由が挙げられる。このような状況がすぐに改善することは望めないため、カシミール史料がどのような情報を伝えているのかを示すことが、まずは肝要であると筆者は考えた。そこで本稿ではこれらカシミール史料の中で、ミールザー・ハイダルの動向について伝えている箇所を邦訳を提示する。

## I ミールザー・ハイダルの動向を伝えるカシミール史料

史料の邦訳を提示する前に、本稿で扱うカシミール史料の概要を紹介する。

### 1. シュカ (Śuka, ca. 1513-38) 『ラージャタランギニー (以下, ŚRT)』

カシミールのサンスクリット歴史叙事詩『ラージャタランギニー (*Rājataranginī*)』の第 6 作<sup>12)</sup>で、プラージャバッタ (Prājyabhaṭṭa, ca. 1486-1513) の歴史叙述に続いて、1513 年

↘ [JRT Introduction: Ogura 2018: 160], アブル・ファズルとニザームッディーン・アフマドは別の情報源に頼っていた可能性が高い。

10) 本稿ではカシミールで編纂されたサンスクリット、ペルシア語史料を「カシミール史料」と総称する。

11) A から I まで九つの断簡が ŚRT に続編として付されており、いずれも 1540 年代から 90 年代に編纂されたと考えられる。編著者は断簡ごとに異なっており、E の著者はほぼ間違いなくシュカとは別人である。

12) 先行する 5 作品は次の通り。1) カルハナ (Kalhana, ca. around 1150) 『ラージャタランギニー』

から1538年までの出来事を記録している<sup>13)</sup>。著者シュカはカルハナ以来受け継がれてきた、歴史上の出来事を正確に記録するという態度を踏襲しており、事実パーニーパトの戦い〔SRT: 1.223〕やバプルの死〔SRT: 2.45〕などの事件が起きた年や事の次第を正確に記している。また貨幣資料との比較からも、同書の一次史料としての信頼性の高さが裏付けられる。本作品は1532-33年に行われたサイド・ハーンのチベット遠征に伴う、ミールザー・ハイダル1度目のカシミール侵入を、カシミール人の側から見た同時代史料である。シュカはモグール軍がカシミール領内に侵入した時期、撤退した時期を記録しているが、後で見ると、これもミールザー・ハイダル自身による記録とほとんど一致している。

訳出にあたっては、信頼できる校訂本として学界で広く利用されている、Śrīkaṅṭh Kaulによる校訂本を底本とした。

## 2. 著者不明『断簡 B (以下, B)』

シュカの『ラージャタランギニー』に付せられた続編群に含まれる、13詩節からなる断簡である。1541年のミールザー・ハイダルによるカシミール支配権の掌握から、1554年の群発地震の発生までの出来事を伝える。この断簡の叙述は非常に断片的であるが、モグールたちがディーワーンを設置して、アラビア文字で書かれた文書を発行し、カシミールの土地を収用したこと〔B: 7〕や、ミールザー・ハイダルが死亡し、モグールが撤退した後も、カシミールの人々の間でモグールがもたらした風習が定着していたこと〔B: 10-11〕など、ペルシア語史料には見られない情報を含んでいる。この断簡の著者はEの著者とはおそらく別人である。Bの著者はEの著者とは異なり、モグールのカシミール支配に対する否定的な感情を露わにしている。当時のカシミールのブラフミンたちの間でも、ミールザー・ハイダル、そしてモグールのカシミール支配について、様々な態度を示す者たちがいたことが分かる。

ŚRTと同様、訳出にあたっては、Śrīkaṅṭh Kaulによる校訂本を底本とした。

## 3. サイド・アリー『カシミール史 (以下, TSA)』

同書は1370年代から1550年代までの出来事を記録したカシミールのペルシア語地方史で、1570年代に編纂されたと考えられている。著者サイド・アリー (Sayyid 'Alī 没年不明) はミールザー・ハイダル治下のシャーミール朝傀儡スルターン、ナズク・シャーの甥にあ

<sup>13)</sup> (1148-49年完成)、2) ジョーナラージャ (Jonarāja, d. 1459) 『ラージャタランギニー』 (1459年中断)、3) シュリーヴァラ (Śrīvara, ca. 1450-1505) 『ザイナタランギニー (Zaynataranginī)』 (1472年完成)、4) シュリーヴァラ 『ラージャタランギニー』 (1486年撰筆)、5) プラージャパッタ 『ラージャーヴァリパターカ (Rājāvalīpatāka)』 (1513年撰筆)。このうち、『ラージャーヴァリパターカ』は現存していない。

13) 2部からなり、第1部は1513年から28年、第2部は1528年から38年までの出来事を記録している。

たる。刊本の校訂者 Zubaida Jan が指摘しているように、TSA は TR 完成後から死までのミールザー・ハイダルの動静を伝える、同時代史料である [TSA Introduction: 16-17]<sup>14)</sup>。

サイイド・アリー自身が語るところでは、彼の父サイイド・ムハンマドはミールザー・ハイダルと友好的な関係を築いており、サイイド・アリー自身も交友があったようだが [TSA: 35]、TR には彼ら親子への言及はない。また、1541 年にミールザー・ハイダルがカシミールの支配権を掌握した際に、アブダール・マーグリー、リーギー・チャク (Rigī Čak)<sup>15)</sup>、サイイド・ムハンマドの 3 名が当時彼を支持していたことを TSA は伝えている [TSA: 34]。しかし、TR がサイイド・ムハンマドに言及していないためか、TA の同じ出来事を伝えている記事には、サイイド・ムハンマドの名前だけがない [TA: 3, 467]。筆者が旧稿で論じたように、サイイド・アリーは自身のスナ派への傾倒から、敵対するヌールバフシーヤに関する出来事の叙述に改変を加えており [小倉 2015b]、著者とミールザー・ハイダルとの関係についても史実ではない可能性を考え得る。とは言え後で見るように、ミールザー・ハイダルがスナ派に傾倒していたことを強調する TSA の記述は、TR の記述とも一致するところが多い。また、TSA のヌールバフシーヤに関する記事については、ヌールバフシーヤ側の史料や他のカシミール史料との比較から矛盾点を指摘することができるものの、ミールザー・ハイダルに関する記事については、そのような矛盾は見当たらない。何より TSA が編纂されたときには、カシミールは 12 イマーム派を奉じていたチャク朝<sup>16)</sup>の治下にあった。当時ミールザー・ハイダルの最期について叙述することが、著者の政治的立場に有利に働いたとも考えにくい。以上の点から、ミールザー・ハイダルに関する記事については比較的信頼を置きうると言える。

訳出にあたっては、Jan の校訂本を底本とした。しかしこの校訂本は印刷時の誤植がしばしば見られる。誤った綴りを修正するために、Oriental Research Library 739 写本も利用した (TSA\_ms)。また、校訂者による英語訳も適宜参照した。

#### 4. 著者不明『王の庭園』(以下、BS)

BS は 1614 年から 18 年までの間に完成したカシミールの地方史で、原初から 1614 年までの出来事を記録している。カシミールの古代史についてはラシードウッディーン (Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, d. 1318) の『集史』、ないしハーフィズ・アブルー ('Abd Allāh ibn Luṭf Allāh Bihdādīnī "Ḥāfīz-i Abrū," d. 1430) 著『改訂版集史』の「インド史」か

14) 1532-33 年の遠征に関する記事は、同書にはない。

15) この人物は TA や GI ではしばしば Zangī Čak と綴られる。しかし ŠRT でこの人物が Riga Cakreša と呼ばれていることから [ŠRT: 2.138]、Zangī Čak という綴りは書き損じと断定できる。

16) チャク氏族のガーズイー・ハーンがシャーミール朝に代わって開いた王朝。1586 年に最後の君主ユースフ・シャーがアクバルと和約を結び、カシミールがムガル帝国に併合されたことで、同王朝は滅亡した。

らほぼ引き写しており<sup>17)</sup>、またシャーミール朝時代の出来事については、ジョーナラージャ、シュリーヴァラ、プラージャバッタ、シユカによって編纂された一連の『ラージャタランギニー』のサンスクリット原典を典拠にしている [Ogura 2010-11: 47-53]。ŚRT の叙述が終了する 1538 年以降の出来事を、著者が何に拠って執筆したのかは不明だが、TR を参照していたことはほぼ間違いないと思われる。

BS の成立はミールザー・ハイダルが没してから約 65 年後のことであり、著者がミールザー・ハイダルの存命中に生まれていた可能性は低い。しかし同書は、ミールザー・ハイダルの 1532-33 年の遠征、1541 年以降の実質的なカシミール統治、そして死に至るまで、上記のカシミール史料や、TA をはじめとするムガル帝国側の史料と比べても、圧倒的に豊富かつ独自性の高い情報を伝えている。その叙述はまるで著者が現場を目撃していたかのように克明であり、この無名著者が TR などを基に、様々な先行情報を整合させるかたちで、一種の歴史小説を創り上げてしまった可能性も否定できない。しかしながら、17 世紀第一四半期のカシミールにおいて、ミールザー・ハイダルがどのように語られる存在だったのかを知る上では、同書の記述は貴重かつ有益であり、ここに該当箇所を訳出する意味を見出すものである。

訳出にあたっては、大英図書館 India Office Islamic 943 写本を底本とした。

## II カシミール史料の邦訳

### I. ŚRT 第 2 巻 59-87 頌

秋季のマールガ月に、吉祥なるサイド・ハーン王に [仕える]  
ミールザー・ハイダルをはじめとするカーシュガルの軍隊たちが [59]  
12,000 騎の騎兵を引き連れて、カシミールを征服すべくやって来た。  
鷹が他の鳥たちを捕食するためにやって来るように [60]  
彼らはコータ<sup>18)</sup>からガガナ山<sup>19)</sup>の麓にやって来て、それから王都に入った。  
善き人々はこの出来事について聞いて、震えた [61]  
トゥルシユカ (テュルク) の災厄<sup>20)</sup>よりも、カーシュガル人の災厄がより大きいと  
人々は考えた。月食よりも日食が大きいと区別される [ように] [62]  
[災厄を逃れるため] 生きとし生けるものが [まちを] 去り、家の連なりは  
さながら死体の山のように息づかい一つなく、恐ろしいものとなった [63]

17) BS の著者が『改訂版集史』を参照していた可能性については、大塚修氏からご指摘を受けた [大塚 2016: 90, n. 42]。記して謝意を表する。

18) コータは砦を意味する一般名詞。直後にガガナ山への言及があることから、カルギルースリナガル間のスインド川に沿って伸びる峠道に置かれていた、交通監視のための砦と考えられる。

19) 北緯 34 度 16 分、東経 75 度 11 分に位置する山で、標高 2255 m。

20) これは前年に実施された、パーブルの次男カムラーンによるカシミールへの軍派遣のことを指している。

激しい炎を与える者（モグール）たちは、家々を燃やしてしまうために  
 スイカンドラプラ<sup>21)</sup>の王宮を征服しつつ、愉しんだ [64]  
 10万軒の大小さまざまな家々が燃えてしまい、そのまちの土地は  
 燃えた木材が [転がる]、恐ろしい火葬場の土地のようになった [65]  
 この1000万人もの人々が石膏や木材やレンガや絵画に囲まれて過ごす  
 [スリナガルの] ような王都が、王たちによってどこで二つと獲得されようか [66]  
 吉祥なるザイナナガル<sup>22)</sup>も、ディッターのマタ<sup>23)</sup>も、火が燃やしてしまった  
 王たちの善行 [が実体化した] ような二つの王宮<sup>24)</sup>として、そこに在ったのに [67]  
 家に残された市民の富や宝を奪わんとしているモグールたちは  
 確かに屍鬼の振る舞いに結びついていた [68]  
 ムレーツチャを恐れるカシミール人の軍隊長たちは、  
 [周囲を] 水に囲まれた王の土地に避難所を求めた [69]  
 チローッタラ、ハー ज्याのアンガクローッタ、チャクラダラ<sup>25)</sup> [の人々] は一方  
 [モグールのことを] 聞いて、ムレーツチャたちと3カ月間戦い続けた [70]  
 ダイティヤの姿をしたカシヤ<sup>26)</sup>たちは、チャクラダラの近くに留まっている  
 カシミール人たちと戦ったが、戦果を生み出さなかった [71]  
 [モグールは] 豊かな収穫物を略奪し、怒りのままに村人たちを殺した  
 マダヴァラージャ<sup>27)</sup>の土地はトゥルシュカ<sup>28)</sup>たちによって不毛になった [72]  
 [繋がれた] 船を渡ってクイ・アーシュラマ<sup>29)</sup>等の土地に移動して

- 
- 21) シャーミール朝第6代君主、スイカンドラ (r. 1389-1413) によって開発されたスリナガル市内の街区で、現在の Rajouri Kadal 近辺に相当する。
- 22) ザイヌルアービディーンによって開発されたスリナガル市内の街区で、現在の Khanyar から Nowhatta 近辺に相当する。
- 23) カーブルのヒンドゥーシャーヒー朝王家の後裔であったカシミールの女王ディッター (Diddā, r. 980/81-1003) が築いた、ブラフミンのための修行場 [KRT: 6.300; 7.11; 8.349] で、スリナガル市内のジェラム川右岸の Nawa Kadal と Safa Kadal の間、現在の Lokhriyaar 付近に存在した。マタの焼失後も地名としては知られていたようで、18世紀半ばにカシミールの地方史 *Wāqī'āt-i Kaśmīr* を編纂したムハンマド・アアザム・ディーダマリー (Muhammad A'zam Didahmarī) のニスバは、ディッターのマタに由来する (Diddāmaṭha > Didahmar)。
- 24) ここではスイカンドラプラを第一の王宮、ザイナナガルを第二の王宮と表現している。
- 25) チャクラプリトとも呼ばれる。北緯 33 度 48 分 20 秒、東経 75 度 5 分 52 秒にかつてあったヴィシュヌ寺院の周辺地域を指す地名である。現在この場所には寺院の基部のみが残っている。
- 26) ダイティヤとは、カシヤパ仙と妻ディティから生まれたアスラの一族。デーヴァ神群と対立する存在とみなされたため、サンスクリット文学においてしばしば暴虐をなす存在として描かれる。カシヤは北インドに居住していた部族民に対して用いられる呼称。ここでの用例は、単に文化的に洗練されていない者たちを指していると思われる。
- 27) カシミール盆地中央部の、スリナガルの南に広がる地域。
- 28) ここでは、トゥルシュカの語でモグールを指している。
- 29) ウラル湖北岸の地域を指す [Stein 1900: 2, 211]。

安全になった老若は、自身の命にまだ残りがあるので喜んだ [73]  
 かつてドゥラチャの災厄<sup>30)</sup>やカッジャラの戦い<sup>31)</sup>があったとき  
 邪悪な者たちの悪しき行いによって、くにに今のような動乱が生じた [74]  
 マーグリー氏族の長（アブダール）はチャク氏族の長（カーギー）に導かれて  
 チャクラダラから移動して王（ムハンマド・シャー）<sup>32)</sup>と合流し、  
 [モグールたちとの] 戦闘に [備えて]  
 ビーマデーヴィーの近く<sup>33)</sup>にキャンプを張った [75]  
 イスカンダル・ハーン、ミールザー・ハイダルら強力な战士们は  
 その戦場に集結し、カシミール人たちに向かって行った [76]  
 マールタンダの麓で [戦闘が発生し、] 双方（モグール軍、カシミール軍それぞれ）から、  
 マリク・アリー、ハサン・ミール、シャイフ・アリー、カマル・ミールが命を捧げた [77]  
 カーシュガル人の勇士たちも、マリク・アリーとの戦闘で  
 自らの力で戦果を挙げて、天に昇った [78]  
 そして、アリー・ミールなる者も戦闘で  
 モグールの战士们によって、くにのために [死んだ]  
 ああ愚か者たちめ！せいぜいアッラーを奉じる<sup>34)</sup>がいい！この死を目にして [なお]、  
 移ろいやすい現世の富 [への執着] を捨て去るがいい！ [79]  
 カシミール人の战士们はこのとき、チャクやマーグリー [氏族] の長たちに  
 励まされたのだが、ヴィドゥラ<sup>35)</sup>のように逃走した [80]  
 頭なく踊る<sup>36)</sup>夜叉である人たち、屍鬼たち、羅刹たちは

- 
- 30) 1320年?にカシミールに侵入し、第2ローハラ朝を滅亡へと導いた軍隊長。ジョーナラージャはドゥラチャのことを「カルマセーナ転輪王の軍隊長 (karmasenacakravartīcamūpati)」として言及しており [JRT: 142]、筆者はカルマセーナをチャガタイ・ウルスのタルマシリン (Tarmaširin, r. 1331-34)、ドゥラチャをドレ・テムル (Döre Temür, r. 1330-31) に同定する仮説を立てているが、その検証作業は別の機会に行わなければならない。
- 31) 1286年12月にカシミールに侵入し、第2ローハラ朝の王ラクシュマデーヴァを殺害した人物。モンゴルの軍隊長 Ḥaġlak に比定されている [JRT Introduction: 60]。
- 32) 当時のシャーミール朝のスルターン。1484-86年の1度目の即位から即位、退位を繰り返しており、このときは5度目の治世 (1529-38) にあたる。
- 33) レーダリー川左岸、北緯33度46分19秒、東経75度12分46秒に今も残っている洞窟内のシヴァ寺院。ヒンドゥーシャーヒー朝のビーマデーヴァ (Bhimadeva, r. 921-64) によって建立された。現在周辺地域は Bumzo と呼ばれている。
- 34) 原文には khadaivasevana とある。Khadaiva はペルシア語の ḥadīw の借用語で、シュリーヴァラ、シュカはアッラーを指すものとしてこの語を用いている [KK: 1.16]。シュカがイスラームに言及する数少ない箇所の一つで、イスラームの来世を重んじる宗教観に言及しつつ、多くの者たちが戦死したさまを嘆いている。
- 35) 『マハーバータ』の登場人物の1人で、カウラヴァ族の大臣。
- 36) 原文の kabandha はアスラの女性ダヌの異名。インドラに罰せられて、頭を胴に埋め込まれた

戦場で多数の〔人々の〕肉を食べることに夢中になっており、さながら  
 〔式場が〕新郎の付添人で一杯になっているかのようにだった [81]  
 戦場という庭で戦士の酒に酔って前後不覚になったので  
 両軍の生き残りは自分たちの居所に戻った [82]  
 それから、チャクの長とマーグリーの長という2人の武勇に優れた者は  
 王の勅令に従って会談し、モグールたちと和約を結んだ [83]  
 9枚の衣服という彼らの言語で〔言うところの〕贈り物<sup>37)</sup>を  
 受け取って、モグールたちは王の御前に〔やって来た〕  
 アラビア文字で“katephasophasaglata<sup>38)</sup>”と書かれ、王の玉璽が押された  
 文書を受け取ると、彼らは大喜びで自らの軍営に戻った [84-85]  
 車に乗せられて連れてこられた愚かな男女を、ハサン・ミールたちが  
 憐みを示して解放し、プシヤトの近くに連れて行った [86]  
 09年ジューシタ月/1533年5-6月にモグールたちは自分たちのくにに帰還した  
 カづくで人々の富と王の娘をともに持ち帰りつつ [87]

## 2. B 1-11 頌

マーグリー〔氏族〕の長アブダールに導かれたミールザーは、  
 チャク氏に対する恐れから、カシミールの征服をできないものと考えた [1]  
 カーギー・チャクがヒンドの地で天に昇ったとき  
 〔盆地の〕外に住むカシミール人たちの心は混乱した [2]  
 その出来事（カーギーの死）を聞いて、ミールザー・ハイダルはカシミールの国を  
 あたかも先祖から継承したものであるかのように、我がものとした [3]  
 チャクの長がいなくなった大地に、ダイティヤの姿をしたモグールたちは  
 如何なる恐れを抱くこともなく、シャーラダー女神のテラス<sup>39)</sup>に広がっていった [4]  
 ミールザー・マシュグールのとどまるカシミールの中に、  
 モグールたちは別の地方から、蜂のようにやってきた [5]  
 彼らの勢力が増大してくると、その土地を何年も前から所有していた人々から  
 彼らは官吏（niyogin）を通じて、土地の収用を始めた [6]  
 ムレーツチャの計算（財務）を司るディーワーン（divana）から発せられたアラビア文  
 字〔の文書〕によって、全土の土地を収用しつつ、人々の収入も徴収した [7]  
 こうして、[46] 22年シュラーヴァナ月/1546年7-8月に、サードヴィーの

<sup>37)</sup> という神話に由来する。ダヌの息子たちをダーナヴァと言い、アスラの一族とされる。

37) 原文には topha という語が用いられている。これはアラビア語の tuhfa の借用語である。

38) 原語を復元できない。

39) シャーラダーはカシミールの地域女神のこと。サラスヴァティーの一形態とされる。

ように震え、死にかけている貧しい人々を [カシミールは] 目撃した [8]  
 カシミールの人々 [が得た] 勝利のために、モグールがぐにから消えたとき、  
 人々は富を得ようとより多くの土地を所有しようとした [9]  
 トウルシュカと一緒に暮らすことを経験して、カシミールの人々は三つのもの、  
 衣服・土地・食事を [彼らがいなくなった後も] 捨てなかった  
 [特に三つ目は] 驚くべき医学的な罰である<sup>40)</sup> [10]  
 悪い行為と知っていながら、人々は食べ物への悪しき欲望を捨てなかった  
 偉大な医者シャーストラに従って患者の治療をやめることがないように [11]

### 3. TSA pp. 33-36.

(p. 33) 彼は、[al-Fiqh al-] Ahwat という本を著した。その本の中では彼自身の異端的な宗派 (madhhab-i rāfiḍī) が明らかである。アブダール・マーグリーの息子サイイド・ムハンマドの息子サイイド・アフマドがリーギー・チャクとともにこの本を帝王フマーユーンの臣下の許に持っていったため、[彼らの] 仲介のもと、ホージャ・ハージーとミールザー・ハイダル・カーシュガリーは、947年/1540-41年に助力者を同行させて、こちら(カシミール)の方角へと向かい、ČYRHHAR<sup>41)</sup>を経由してカシミールに入った。マリク・カーギー・チャクはヒーラプラ<sup>42)</sup>を経由して、家財を (p. 34) 手にヒンドウスターンへと逃れた。この年のラジャブ月 21日/1540年 11月 21日<sup>43)</sup>にミールザー・ハイダルはカシミールの支配権

40) カシミール人に継承された三つの要素のうち、衣服はモグールが着ていた中央アジア風の衣服、土地は6-7頌で言及されているディーワーンを通した土地制度のことを指していると考えられる。食事については不明瞭だが、著者がおそらく肉食主義者のパンディットであったと考え、モグールの肉食の風習がカシミール人に定着したことを指しているのではないかと。

41) 校訂者ジャーンはこの地名を Tserehar とし、ピール・パンジャル・レンジ東側にある村とする [TSA: 116, n. 27]。TA によれば、ミールザー・ハイダルがラージュウリーに到着した際、カーギー・チャクが KWTL KYRTL という峠に軍を配備した。そのためミールザー・ハイダルはこの峠を通ることをやめて、プーンチを経由してカシミール盆地に入ったという [TA: 3, 467]。カーギー・チャクが軍を配備していた峠の名前は史料間で表記に揺れがあり、現在の地名と対応しないが、ミールザー・ハイダルがラージュウリーには到達していること、かつその峠を通過する場合プーンチを経由しないこと、という条件から考えて、ラージュウリーから真北のピール・パンジャル峠を越えて、カシミール盆地南部に入るルートに当たるものと考えられる。ミールザー・ハイダルが採ったルートは、プーンチから東に向かい、トーシャマイダーン峠を越えて盆地西部に入る、後に歴代ムガル皇帝が行幸の際に使用したルートか、あるいはウリーを経由してバーラムーラに入ったものだろう。なお、カシミール盆地に入る諸道については、『慧超伝』の井狩彌介による注を参照 [桑山編 1992: 96-98]。

42) 古くはシューラプラ。ラージュウリーからピール・パンジャル峠を越えてカシミール盆地に入ったところにある村 [Stein 1900: 2, 394]。この村が言及されている場合、ラージュウリーから真北に伸びるルートを移動していたものと考えられる。

43) TR によると、ミールザー・ハイダルは 947年ラジャブ月 22日にカシミールへ通じる峠を通過した [TR: 690]。1日のずれがあるものの、サイイド・アリーはミールザー・ハイダルがカシミール盆地に入った時点で、支配権が彼の手に移ったと考えていたことが分かる。

を獲得して、独立した権限という手綱をマリク・アブダール・マーグリーに委ねた<sup>44)</sup>。また、サイイド・ムハンマドとマリク・リーギー・チャクとは同盟を結んだ。

ちょうどその頃、逃亡していたマリク・カーギー・チャクはシェール・シャーの御前へ行った。[シェール・シャーは彼を]ハーン・ハニー (Hān-i hānī) のマンサブという榮譽に浴させた。シェール・シャーはカシミールの有力者、シャムス・イラーキーの息子<sup>45)</sup>と彼のムリードたちからの書簡に対する信頼によって欺かれてしまった。少数の助力者たちがハサン・シルワーニーとアーディル・ハーン<sup>46)</sup>とともにシェール・シャーから賜暇を得て、ヒーラブラを経由してカシミールへ入った。ミールザー・ハイダルは [著者の] 今はなき父であるサイイド・ムハンマドとリーギー・チャク、マリク・アブダール・マーグリーの息子マリク・ハサン・マーグリー<sup>47)</sup>と合流して、戦闘に臨んだ。KWTL<sup>48)</sup>と WAHH TR<sup>49)</sup>の間の中間で激しい戦闘が勃発し、カーギー・チャクは敗北した。ノウルーズ・チャクは殺された。カーギー・チャクは一群とともに ĆYRHHAR を経由してプーンチに行き、951/1544-45年に亡くなった。ガーズィー [ハーン]・チャク<sup>50)</sup>と彼の兄弟はアフガン人と合流して、ヒーラブラを経由してヒンドウスターンへと向かった。不和と困窮がチャク氏族に生じた。

ミールザー・ハイダルは人々をスナナ派化 (tasunnan) するスローガンを明らかにして、異端派の人々 (ahl-i rafāda) や [その他宗派の] 一部を根こぎにした。彼はシャムス・イラーキーのハーンカーに火を放ち、彼の骨を墓から掘り起こして燃やした。彼の墓があった場所をごみの集積場に定めた。その墓の上で [ごみを] 燃やせるように、毎日千本の薪を [与えるよう] 命じた。市内全域に布告を発して、大便の用をたす (qaḍā-yi hāḡat) ためにその場所に行くようにし、またその場所に [ハーンカーの] 痕跡が一切残らず、全て灰燼に帰すようにした。

955/1548-49年に、シャイフ・ミーリー・シャングリー・リーシー —— 彼はシーア派の人々が聖者性 [を持つ者として] 信頼を置いていた人物の一人なのだが —— が処刑され、磔を命じられた。956/1549-50年に、(p. 35) ミールザー・ハイダルはチベット (バルティスタン)<sup>51)</sup> へ行き、シャイフ・ダーニヤールを捕らえ、連行した。ダーニヤールはミール

44) ミールザー・ハイダルは支配権を掌握した後にカシミールを3分割して、二つの地域の支配権をアブダール・マーグリーとリーギー・チャクに安堵した。アブダールはクラマラージャ地域の支配権を有していた [TA 3, 467]。

45) 直後に登場するダーニヤールのこと。

46) シェール・シャーに仕えるこの両名はTAでも言及されている [TA: 3, 468]。

47) TRによると、スール朝軍が到来する直前にアブダール・マーグリーは没している [TR: 691]。

48) 特定できなかった。

49) Wahtorのことか。この村は北緯33度58分、東経74度51分に位置し、スリナガルからピール・パンジャル・レンジの入り口であるショピヤンに伸びる道の中途にある [Bates 1873: 398]。

50) ハサン・チャクの息子で、カーギー・チャクの甥に当たる。後に1561年に開かれたチャク朝の初代スルターンとなった。

51) カラコルム山脈の南側、ギルギットの東に伸びるインダス川流域を指す呼称。中心都市はスカフ

ザー・ハイダルがやって来るという情報を聞いてチベットに逃亡していたのだが、拘束された。そして 960 年（ママ）サファル月 24 日<sup>52)</sup>に、カーディー・ハビーブッラー、カーディー・イブラーヒーム、ブハーラー [出身] のムッラー・アブドゥルガフル・カーディーザーダによって発せられたファトワーに従い、彼を処刑した。

シーア派の人々においては敵意が増大し、ミールザー・ハイダルの行為を憎み、反乱と反抗を行う段階に至った。それは、諸パルガナのありとあらゆる場所で、人々を遠ざけて、一部の者たちを殺し、一部の者たちの耳や鼻を削ぎ落とし、腕を切り落として放り出すほどのものであった。マリク・イーディー・ライナはヒーラブラを経由してカシミールに出立し、ガズイー・ハーンと合流した上で、ナウシャフル<sup>53)</sup>にいたダウラト・チャクに使者を送った。彼は決起して入城した。多くのカシミールの人々の集団もまた、彼の許に集結し、ゆっくりと、しかし着実に、カシミールのまち（スリナガル）へと向かった。ミールザー・ハイダルはモグールたちの一群を前述の場所（アールドロータコータ）に女性たちの保護のために残しており、1000 人のモグールの人々と、カシミール人の一群と合流して、敵 [の方] に向かった。そうした中で、ミールザー・ハイダルは自身のアミールたちのうち、ムッラー・カースィムとムッラー・バーキルにチベット地域の支配を任せていたのだが、チベットの人々が結託して、ムッラー・カースィムを殺害した。ムッラー・バーキルは逃亡した。パクリー<sup>54)</sup>の経営者・支配者であったムッラー・アブドゥッラー・サマルカンディーも [当該地で] 敗北を喫し、カシミールへの帰還の途上にあっただが、バーラムーラ<sup>55)</sup>の近くでカシミール人たちの手に落ちて、殺害された。これらの情報を聞いて、驚きと悲しみがミールザー・ハイダルを支配したが、しかしそれにもかかわらず、カシミール人たちの許へと向かい、WAHH TR 村に下馬した。カシミール人はダウラト・チャクとともにハンプル<sup>56)</sup>のまちの近くにある城砦に居を定めた。ミールザー・ハイダルは夜襲を狙って、7,800 人の騎兵を組織して、カシミール人たちの許へと急進した。この件についてはこの紙葉 [の著者である] サイド・アリーの父、今はなきサイド・ムハンマドが制止したのだが、ミールザーは聞き入れなかった。チャクの人々は町での略奪を開始した。我々（著者親子）は町に自分の家の警護のためにやって来た。ミールザーは [父の] この忠告を聞き入れずに (p. 36), 城砦の麓へ行き、そこで待機した。[当初] 30 人の手勢がミールザーに同行してその丘の上に向かっていたのだが、道中に [手勢を失ってゆき,] 僅か 7 人で戦場に臨むことに

<sup>52)</sup> ルドゥ。16 世紀前半以降ヌールバフシーヤが道統を確立し、現在も教団が存続している。

<sup>53)</sup> 後に見る BS の記述から分かるように、957/1550-51 年の誤記であろう。

<sup>54)</sup> 北緯 33 度 9 分 37 秒、東経 74 度 14 分 40 秒に位置する、現在の Noshera に当たると考えられる。

<sup>55)</sup> 現在のパキスタン側アーザード・カシミール州の中の、ジェーラム川とインダス川に挟まれた地域を歴史的にこう呼んだ。中心都市はムザッファラーバード。

<sup>56)</sup> カシミール盆地北西部の Baramulla のこと。

<sup>57)</sup> バーラムーラのすぐ西にある Khanpora のことか。

なった。そして957年ズルカアダ月7日/1550年11月17日の夜、神の運命により、矢の傷がもとでミールザー・ハイダルは死んだ。彼の治世は10年であった。しかし、フトバではナズク・シャーの名が詠まれていた。彼もまたスンナとジャマアの民であり、それゆえにミールザー・ハイダルは彼を廃することができなかったのである。

多くの者たちがこの戦いについて引用している。ミールザーが城砦の中に入ろうとしたとき、月が昇った夜であった。彼の足に矢が刺さり、即死だった (dar hāl fawt šud)<sup>57)</sup>。最終的に、サイイド・ムハンマド、マーグリー氏の人たち、その他の一群が[その場所に]向かい、ミールザー・ハイダルの祝福された遺体を運び、[シャーミール朝の]スルターンたちのマザールに5日後に埋葬した。騒乱と動乱が発生し、ダウラト・チャクとその他の人々はミールザーの遺体を燃やそうという意図を持っていた。サイイド・ムハンマドは自身の手勢の者たちを集めて、1ヶ月間にわたって前述の墓地を守り続け、そして彼の墓に墓石が据えられ、ようやくそこから離れた。ガーズイー・ハーンは人々を集めて、この紙葉の著者の父サイイド・ムハンマドの家に侵入しようとした。しかし、ナズク・シャーの姉妹がサイイド・ムハンマドの妻となっていたので、ナズク・シャーがそれを止めた。

ガーズイー・ハーンは件の人々を集めて、ミールザー・ハイダルの家の人々がいたアールドロータコータに向かった。その場所を管理していた何人かのモグールたちは、恐れて家の中に入った。卑しき者ども (nā ahl) は彼らの後をついて行って家の中に入り、殺害と略奪の長い手を伸ばした。彼らは男性たちを殺そうとした。するとミールザーの妻 (ムヒップ・スルターン・ハニム) たちが武器を手に取り、騎乗して外に出てきた。彼女たちは戦場でミールザーのように殉教することを望んだ。ガーズイー・ハーンやその他の者たちは、「彼女たちを殺すということは、女性を殺すということである。またもし彼女らの手によって司令官が殺されたりしたら、某という司令官はミールザーの妻によって殺されたのだと、物笑いの種となる」と考えた。最終的にアフマド・マーグリーの息子たちやその他の者たちが集まって、両者の間で和約が結ばれ、ミールザーの人々には、自分たちのくにに帰るよう安堵が与えられた。

#### 4. BS

【1532-33年の遠征について】 ff. 97b-101a

(f. 97b) 939年、スルターン・サイイド・ハーンがカーシュガルからチベットにやって来て、域内の様々な場所で侵略や略奪行為を暫くの間行っていた。カーシュガルへと戻る道が[冬季で]通行不能となり、彼はチベットで冬を越すことを決意した。しかし、チベットには彼の軍全てを[滞在させるだけの資源的]余裕がなかったので (f. 98a)、サイイド・ハー

57) 校訂本では dar hāl quwwat šud とあるが、TSA\_ms に従って quwwat を fawt と読み替える [TSA\_ms: 27b]。

ンは自身の息子であるイスカンドル・スルターンを、何人かのアミールとともに彼自身の軍隊に同行させ、ミールザー・ハイダルを軍隊長に任命して、カシミール方面に派遣した。彼らはルールを経由して、カシミールの郊外に入った。カシミールのアミールたちはルールのバルガナ〔を守る〕力を失い、ハーンジーク<sup>58)</sup>の城砦に入った。ミールザー・ハイダルはナウシャフル<sup>59)</sup>にとどまった。彼らがハーンジークの城砦の防御を堅固なものにしたため、ミールザー・ハイダルはマラージ (Marāj) <sup>60)</sup>の方に向かい、町全体に火を放って燃やした。そしてマラージ地域を巡って場所という場所を回っては、カシミールのアミールたちを自分たちの陣営に編入させ、〔再び〕ルールに向かった。テュルクたちの軍が下馬するごとに、その場所でカシミールのアミールたちを編入させてゆき、彼らがいる場所の近くに下馬した。まちの人々、王国の人々はみな住んでいる場所を離れて、山々や島の高い場所に避難した。モグールの軍隊は行った先々で人々を殺し、限りのない殺戮と流血を尽くした。そして人々の家財・荷物・財産を略奪・強奪した。女たちや子どもたちを捕らえて、奴隷にした。不浄なことや信仰を欠く状況が甚だしきものとなり、人々はイスラームのまちを戦争の家と見做した。そして (f. 98b) ムスリムの血を〔流すことを〕自身の母親の乳〔、すなわち合法〕と考えた。

カーディーたち、ウラマー、法学者たち、有徳者たちは住んでいる場所を離れて、ランカー島<sup>61)</sup>に避難していた。イスラームの徒であるアミールたち、ハーキムたち、王たちはウラマーやカーディーたちや法学者たちやサイドたちを訪ね、ファトワーを求めた。すなわち、カシミールの人々の側で殺されてしまった信仰者たちやムスリムたちは、預言者の偉大なる聖法、清浄なる者の輝かしき宗教の教義に照らして、〔審判の日に〕いかなる類の状態となるのか。モグールの側で殺された人々は、どうなるのか、と。そこでウラマーや有徳者たちや有力者たちや法学者たちは一致して、以下のようなファトワーをしたためた。[[イスラームの] 信仰のウラマーの言葉、ムジュタヒドたるイマームたちのファトワーによれば、この地で殺された者は貴賤に関わらず<sup>62)</sup>、神の許での殉教者となり、压制者に抑圧された者と位置づけられる。偉大さを持つ人々、勇敢さの持ち主のうちにも、イスラームの人々のまちまちを征服・支配し、ムスリムたちの財産や子どもたちを略奪・強奪する者たちがいる。人々にとってのウラマー、イスラームのムジュタヒドたちはそういった人々を大声で压制者と呼ぶ。ムハンマドの聖法、誉れ高い宗教において、そういった人々を殺すことは許容される。それどころか義務と見做される。そして (f. 99a) 彼らの血はハラールであるばかりか、

58) スリナガルから4マイルほど西にあった村 [Bates 1873: 204]。

59) ここで言及されているナウシャフルは、スリナガルの新市街のことを指していると思われる。

60) マダヴァラージャ (Madavarāja) の転訛。

61) ザイヌルアービディーンが1442-43年にウラル湖に築いた人工島 [JRT: 941]。湖上の北緯34度22分7秒、東経74度37分17秒の座標に現在も残っており、ムガル帝国時代には第4代皇帝ジャハーンギール (Ġahāngīr r. 1605-27) が船でこの島を訪れていた [Sharma 2017: 86-87]。

62) 貴賤にかかわらずという表現を、ペルシア語とアラビア語で2回繰り返している。

彼らを殺すことは正しい行いと言われる。」

カシミールのアミールたちはこのファトワーを手に取り、男らしさと勇敢さ [をもつ者たちは] 彼らの後を追った。そして一つ一つの宿駅ごとに彼らの足取りを追った。このようにして、冬のあいだじゅう過ごし、春の初めにバービル (Babil)<sup>63)</sup> の荒野の近くで、カシミールの歩兵とモグールの軍隊はお互いに相対した。(中略) (f. 99b) カシミールのアミールたちのうち、多くのテュルクたちと [直接] 戦っていたのは、マリク・アリー [率いる] 一群であった。一方モグール軍の中にはバーバー・スイラク・ミールザーが約 500 騎の胴甲着と曲刀を装備した騎兵と [ともにおり、] 両者はお互いに激突、戦闘と闘争へと身を投じた。マリク [・アリー] はこの戦争が多くの人々の血を流すものであるを知って、ウラマーや有徳者たちから殉教に関する法規に基づいて発せられたものであるファトワーを人々に示して、「私がこのファトワーに基づき、モグール軍と戦闘することを証言する者がいますように」と口にした。そしてそのファトワーを自身の腋に挟み、「慈悲深く慈愛遍き神の御名のもとに」と [唱えた]。そして、マリク・ムサー・ライナの息子と、マリク・シャイフ・アリー・バットと多くの勇ましさと知られる勇敢な者たちは、テュルクたちとの戦闘の火蓋を切った。彼らは勇ましさと男らしさの規範を示し、多くのモグール軍に傷を負わせ、一部の者たちを地面に倒れさせた。そして当代の勇敢な者たちの 1 人であるベグのスイラク・アリー・ミールザーの黒い馬に、一撃で彼が後方へ退かなければならなくなるほどの傷を負わせた。彼は別の馬に騎乗して、敗走した。モグール軍はじわじわと右翼が崩れ始めた (f. 100a)。右翼からダーイム・アリー・ベグ<sup>64)</sup> が約 1000 騎の騎兵を率いて、またミールザー・ハイダルも左翼から約 1000 騎の騎兵を率いて [前に躍り出て]、2000 騎でもって戦争と戦闘に臨んだ。マリク・アリーとマリク・フサイン・ライナ・ブン・ムサーとマリク・シャイフ・アリー・バットもまた、彼らに対する戦闘にかかり、類まれな努力・尽力・奮迅・奮励を勇氣と勇敢さを示していた。しかし、主の恩寵による神助と、讃えられるべき者の顧慮によるご助力が [彼らに] 有利に、また助けにならなかったため、勇者たちの努力・尽力からは何も解決されず、彼らの奮迅と奮励は如何なる利益も生み出さなかった。たとえマリク・フサイン・ライナやマリク・シャイフ・アリー・バットやその他の勇者たち、勇敢な者たちが勇ましさと男らしさの規範を示しても、最終的に運命の強襲によって足から崩れ落ちた。騎兵 [であった前述の 3 人ら] が [カシミール人の軍の] 歩兵と軍隊を背後にして [前線で] 防衛していた状況にあって、彼らが殉教のシャーベットを味わったので、残りの軍はその戦場から逃れる手綱を引いた。カーワルパーラ (Kāwarpāra)<sup>65)</sup> の川があるレーダリー谷において、約 1500 人が死んだ。残りのアミールたちや軍は逃亡した。マリ

63) おそらく、ビーマデーヴィーの転訛である。

64) ミールザー・ハイダルに同行していた古参のアミールで、TR では 917/1511 年の記事に既に登場する [TR: 373]。1532-33 年の遠征に同行していたことにも言及がある [TR: 616]。

65) この近くにあった聖泉のサンスクリット名 Kapaṭeśvara が転訛したものと考えられる。

ク・カーギー・チャクは息子たちや歩兵の一群を同行させて (f. 100b), バービルの荒野にほど近い高台に登った。凶暴なライオンの如き勇敢さを備えたイブラーヒーム・ハーンは、なおも敵に対する戦闘を続けた。彼は炎を散らす武器を手に持ち、[彼の乗る] 駿馬はあらゆる方向に飛び回った。彼は勇敢に戦い、運命と天命の曲刀で敵の集団に一撃を食らわせていった。

その戦場では人を殺す者は 殺すことで相次いで良いものを得る

この世界を燃やす火 [を持つ者] に敵対する側の軍 (モグール) は、[彼に従う] 集団がみな敗走し、もはや彼が単身で勇猛さを示しているのを目にしたとき、直ちに殺害の悪しき旗を掲げて、勇ましきで知られるイブラーヒーム・ハーンを包囲した。カシミールの人々が全て敗走し、バービルの荒野から離れたとき、彼は曲刀で敵対する集団の列をこじ開けて、マリク・カーギー・チャクに合流した。[他の] 敗残者たちも、その高台に集まった。そして彼らは数日間そこにとどまった。やがて周辺・周囲から傷を負い敗走した人々が集まってきた。彼らは再びモグールへの闘争と報復を与えるために立ち上がった。

そのときミールザー・ハイダルは、チベットにいる (f. 101a) スルターン・サイド・ハーンに以下のようなファトフナーマを自ら書いて送った。「シャアバーン月4日/1533年3月1日にバービルの荒野近くで、カシミールの軍隊と激しい戦闘を行った。両陣営に多数の戦死者が出た。至高なる神たる御方は勝利の門、戦勝の扉を、勝利を得た軍隊へとお開きになられた。」スルターン・サイド・ハーンのオールドには1人のカーディーがおり、彼はまさにこのシャアバーン月4日をクロノグラムとして<sup>66)</sup>、次のような詩を詠み、書いて返送した。

神に讃えあれ。というのもかの公正なる王  
スルターン・スイカンドル、ときのハーカーン  
[サイド・ハーンの] 息子たる彼の先駆けは若く瑞々しく  
バービルの荒野、スライマーンの玉座 [にて]  
敵たちを減らすことについて、好機とは言えない日ですら  
神の慈悲により、征服者となった  
神の慈悲により、勝利・制覇を得た  
カシミールはイーラーンの支配下に  
彼が勝利した日付は、まさにその日である

66) RWZ ĠHARM AZ MAH ŠBAN=200+6+7+3+5+1+200+40+1+7+40+1+5+300+70+2+1+50=939

シャアバーン月の4日

ミールザー・ハイダルは、「この日付は自分が書いて送ったものだったのに、[アブジャド数字を] 計算していなかった」と残念がった。

マリク・カーギー・チャクとその他カシミールのアミールたちは、自分たちが被った敗北・敗走にもかかわらず、再びテュルクたちに対する報復 (f. 101b)、モグールたちに対する妨害に足を据え、モグールの軍団が滞在するために向かったところにはどこであれその近くに下馬し、彼らを待ち伏せした。最終的にモグールたちは選択肢がなくなり、ミールザー・ハイダルとダーイム・アリー・ベグの間に対立・反目が生じた。ダーイム・アリー・ベグはカシミールのアミールたちと、和平交渉と停戦の条件設定にとりかかった。ミールザー・ハイダルはしぶしぶそれに同意した。ムハンマド・シャーの兄弟の娘をイスカンドール・ハーンの妻として得て、スルターン・サイド・ハーンのための贈り物・貢物を準備・用意させた。彼らはかつてやって来たときに経由したラールを通過して帰還・帰途についた。

【1540-41年の2度目の遠征について】 ff. 106b-108b

(f. 106b) 以下のことを知れ。マーグリーたちはカンスーで敗北を喫し、ヒンドの山岳地帯に落ち延びた。暫くしてからマリク・リーギー・チャクも彼らと合流した。ちょうど同じ頃、フマーユーン皇帝が[シェール・シャーに敗れて]アグラ地方を喪失し、ラホールに滞在していた。ヒンドゥスターンの支配 (f. 107a) の玉座には、ハーキムであり征服者であるシェール・シャーがいた。マリク・アブダール・マーグリーとマリク・リーギー・チャクは自らの息子たちをラホールに住まわせており、彼らを[フマーユーンの]玉座へと遣わした。ヒンドゥスターンではフマーユーン皇帝の御前に臣従していたミールザー・ハイダルに、彼らはホージャ・ハーギーの仲介のもと救援を依頼した。彼らはカシミール方面へ向けて出発した。マリク・カーギー・チャクとサイド・イブラーヒーム・ハーンは自分たちの軍を集めて、戦闘・会戦をすることなくヒーラブラの道を押さえた。

ヒジュラ暦947年偉大なるラジャブ月21日<sup>67)</sup>——この年はカシミールの[サブタルシ]暦では[46]16年にあたる——にマーグリーたちはモグールの軍隊を得て、チーラハラ<sup>68)</sup>を経由してカシミールに入った。マリク・カーギー・チャクとイブラーヒーム・ハーンは[自軍の]一群とともにヒーラブラから出発した。ミールザー・ハイダルはカシミールのアミールたちと良い方法で交流・和睦した。彼はカシミールを3分割し、1つの部分をミールザー・ハイダルのものと定め、1つの部分をマリク・アブダール・マーグリーに、ワズィール権と統治権を合わせて委ねた。残る1つの部分をマリク・リーギー・チャクに安堵

67) TSAの記述と同様に、BSもミールザー・ハイダルがカシミールに入った日を947年ラジャブ月21日/1540年11月21日としている。

68) TSAで言及されているČYRHHARと同じ場所であろう。

した。この規定は (f. 107b) 冬の間続き、初春のカシミールの人々にとってのノウルーズの日 (チャイトラ月初日)、マリク・アブダール・マーグリーは「人は全て死を味わう (Q21: 35)」[という聖句] に従って、虚しき家から永遠の家へと旅立っていった。ミールザー・ハイダルはマリク・アブダール・マーグリーの長男であるマリク・フサイン・マーグリーを [マーグリー氏族の] 族長の座に就け、ジャーギールと独立権を彼に定めた。彼のジャーギールに対して、いかほども獲得を望んだり、不当な権利要求をしたりすることもなかった。

マリク・カージー・チャクはヒンドの山岳地帯からシェール・シャーの許に支援と援助を求めて向かった。シェール・シャーは彼をきわめて丁寧かつ丁寧な態度で彼を御前にこさせた。シェール・シャーは [彼の] 頭から足に至る傷跡を見た。彼の頭は禿げ上がっており、傷による衰弱のあとが見て取れた。シェール・シャーは訪ねた。「1度の戦闘でこれらの傷がついたのか。それともカシミールでの幾度にもわたる戦闘で。」マリク・カージー・チャクは答えた。「幾度もの戦闘と、多くの戦争の中で、これらの傷が私についたのです。」シェール・シャーは彼に多くの慰労と教え切れぬねぎらいを示し、ハーニ・ハーナーンの称号を授けた。そして「お前の心が望むものは何であれ、援助・支援されよう」、と言って自由にさせた。マリク・カージー・チャクはその地のアミールたちの手紙と約束 (f. 108a) を信頼して、フサイン・シルワーニーとアーディル・ハーンを少しばかりの集団とともに同行させ、道が開いたときにカシミールへヒーラプラを経由して入った。ミールザー・ハイダルは DKNKWKH<sup>69)</sup> にホージャ・ハージーにサイイド・イブラーヒーム・ハーンを同行させて、マリク・リーギー・チャクの許へ派遣した。そして協約による懐柔を大に行い、合流させた。彼は妻や女子供をアールドロータコートに残して、両軍はワーフトール<sup>70)</sup> という場所で戦闘状態に入った。およそ一ヶ月間お互いに戦闘・戦争が続き、一ヶ月後に川の氾濫と多量の洪水のために、[両陣営は] その場所を離れた。マリク・カージー・チャクは KBRBWAR<sup>71)</sup> に陣を敷き、ミールザー・ハイダルとマリク・リーギー・チャクはコーター<sup>72)</sup> に陣を敷いた。ワーフトールの間 [の場所] で両軍の間に激しい戦争が生じた。ハティーブのムッラー・ユースフはこの戦争のクロノグラムを「繰り返される勝利<sup>73)</sup>」と呼んでいた。[この年はサプタルシ暦 46] 29 年 [に一致する]。この戦争でマリク・ノウルーズ・チャクが殺され、神の運命に従って、マリク・カージー・チャクの軍隊が敗北・敗走するに至った。マリク・カージー・チャクと (f. 108b) ミール・サイイドと (ママ) ミール・サイイド・イブラーヒーム・ハーンとマリク・ダウラト・チャクは歩兵のアミールたちの一

69) Dakinkot のことか。北緯 34 度 43 分、東経 74 度 2 分に位置した村 [Bates 1873: 171]。リーギー・チャクはもともとここからほど近いクープワラを拠点にしており、このときリーギーは一旦本拠に戻っていたものと考えられる。

70) TSA で言及されている WAHH TR と同じ場所であろう。

71) 不明。

72) 現在の Nowgam Kothar で、アナントナーグから東南東に 8km ほどの場所にある。

73) FTH MKRR = 80+400+8+40+20+200+200 = 948

団とともにヒーラプラを経由してヒンドへ逃亡した。マリク・リーギー・チャクは勝利を得たのち、ミールザー・ハイダルから賜暇を得て、カムラージ<sup>74)</sup>に行き、そこに定まった。

【ヌールバフシーヤに対する態度について】 ff. 108b-110a

(f. 108b) マリク・リーギー・チャクが支配と国運の玉座に落ち着いている間、ミールザー・ハイダルはあらゆる点において彼が命じることについて同意しており、彼の見解に同意していた。彼の話すことに異を唱えたり、侵害したりすることはできなかった。彼の従順さ・素直さに関しては、次のようなことがあった。シャー・サイイド・アフマド・マジューズ<sup>75)</sup> 猯下 —— 彼の秘密が清められますように —— がその清浄なる歩みでカシミールのくりに来駕されたとき、前述のマリクはミールザー・ハイダルに言った。「シャー・アフマド・ヌールバフシー猯下はザディーバル<sup>75)</sup>の住居に到着されました。私は猯下との会見に向かいたいと考えています。あなたは何が良策と考えますか。」ミールザー・ハイダルは言った。「私の顔と目もあなたと同じ方を向いている。しかし今は南中時刻に近く、猯下の御前に暫くいなければならないとなると、暑さのため猯下はお疲れになるだろう。あなたは自分の居所で昼寝をするといひ。私も自分の家で眠ることにする。ズフル礼拝（正午過ぎの礼拝）の後で共に行こう。」前述のマリクは自分の家（f. 109a）に戻って眠り、ズフル礼拝の時刻まで目を覚まさないままだった。ミールザー・ハイダルはまず礼拝を行ってから、「シャー・サイイド・アフマド・ヌールバフシー猯下に面会しに行くので、あなたも起きてくれ」と、人をマリクの許に送った。マリク・リーギー・チャクは起きて、ズフル礼拝を行っている最中であり、まだ準備ができていなかった。ミールザー・ハイダルは騎乗して、マリク・リーギー・チャクの家へ行った。前述のマリクも家から出て、ザディーバルの居所へ向かった。アミール・シャムスッディーン・ムハンマド・イラーキー猯下 —— 彼の秘密が清められますように —— の輝かしき廟に2人が到着したとき、ミールザー・ハイダルは直ちにまったり謙遜と信愛の情と疑いのない従順さでもって、猯下の墓室へと入った。最初に猯下の墓の前、[遺体の] 足側に立ち、[クルアーンの] 開扉章を唱えた。開扉章の後で、墓のキブラの方向に向かって座り、偉大なるクルアーンの幾つかの章を朗唱してもらうように、1人のハーフィズを求めた。そのとき、ヒンドから[カシミールに] 来ていて、正しい知識と朗唱法を心得ていたホージャ・イスマエイルが召喚され、猯下の墓の近くに座り、台座の節(Q2: 255)を朗唱した。[台座の節の] 朗唱の後（f. 109b）、再び開扉章を唱えた。それから謙遜さと従順さを伴って、猯下の[墓所の] 外に出た。彼と知り合いの者も彼のことをあまり知らない者も、[それを見て] 驚き、「この場所のムリードたちや献身者たちは、参詣の作

74) サンスクリット史料に登場するクラマラージャ (Kramarājya) が転訛したもので、カシミール盆地中央部の、スリナガルの北側の地域を指す。

75) スリナガル北西部にある、かつてシャムスッディーン・イラーキーがハーンカーを築いた地区。現在の住民の大半は12イマーム派になっている。

法や献身さと忠誠の基礎をこの人物から学ばなければならない], と言っていた。

それから、ハーンカーの最上階でシャー猯下と会見した。彼は猯下との対談と会話において、ヌールバフシーヤの誉れ高き道統に対する自身の信頼と献身さを繰り返し表明した。話をしている間、ザディーバルのスーフィーたちに対して説教と忠告のやり方で話を始めた。マリク・リーギー・チャクは自身の近習たちの方に顔を向け [つつミールザーに対し] て、非難するように「我々はあなたのこのような会話のためにここにやって来たというのか」と言った。ミールザー・ハイダルはマリクの不快感を考慮して、自らの話を中断し、別の話題に移し、別の話に集中した。それから、シャー猯下に別れを告げて、近習たちが到着するまでの間、ハーンカーの境内全てを後ろ向きで歩き、猯下に対して背中を見せなかった。それからその階を下りて、ハーンカーの内側と外側を見物した。それから、ハーンカーの絨毯を敷いてある境内 (f. 110a) と石堀を見た。そして高潔な行いで、アミール・シャムスッディーン猯下を称賛し、賛美を口にしていた。ミールザー・ハイダルはこれら全て [の行為] をマリク・リーギー・チャクの歓迎と、ご機嫌取りのために行っていたのであり、実のところ内心ではかの道統に対して敵意と悪意を抱いていた。そして好機が訪れたときに、それを明らかにしたのである。

【シャイフ・ダーニヤールの処刑について】 ff. 110a-112b

ミールザー・ハイダルがカムラージにいたとき、シャイフ・ダーニヤール猯下はシャー・サイド・アフマド・ヌールバフシー猯下の到来の情報 (f. 110b) を聞き、チベットからカシミールの方へと出発した。KRĠ という場所<sup>76)</sup>に到着したとき、マリク・リーギー・チャクの破滅について聞いた。必要に迫られて、ダーニヤールは DRNG<sup>77)</sup>に下馬し、自身の荷物や馬具を DRNG に残して、ミールザー・ハイダルの軍営に向かい、マリク・イーディー・ライナのオールドに下馬なさった。マリク・イーディー・ライナは極めて丁寧かつ丁寧な態度でシャイフ猯下との会見に臨んだ。そのとき、マリク・イーディー・ライナはシャイフ猯下の庇護と援助と奇跡を行うことに疑いを抱いていなかったが、最終的に猯下に対する信頼を捨ててしまった。ミールザー・ハイダルはマリク・イーディー・ライナの庇護がなくなったことを知って、大胆不敵かつ向こう見ずに、シャイフ猯下を殉教させるという罪を犯した。マリク・リーギー・チャクが敗北を喫し、プーンチにとどまったその翌年、彼はマリク・カーギー・チャクと合流し、ハウール (Hawil) を経由してカシミールに入り、グーリマルグ (Gūrimarg) の山<sup>78)</sup>にとどまった。ミールザー・ハイダルはモグールとカ

76) 特定できなかった。

77) 北緯 33 度 57 分、東経 74 度 35 分に位置する小村 Drang のことか [Bates 1873: 180]。ダーニヤールがピール・パンジャル・レンジを西から東に横断して、カシミール盆地に降りた直後のことと考えられる。

78) 現在のグルマルグ (Gulmarg) で、北緯 34 度 5 分、東経 74 度 25 分に位置する。

シミールの人々の集団を率いて、リーギーらを包囲した。暫くしてから、テュルクの一群が (f. 111a) 彼らに夜襲を仕掛けた。マリク・カーギー・チャクとマリク・リーギー・チャクとミール・サイド・イブラーヒム・ハーンはそこで敗北を喫し、再びヒンドの山岳地帯に逃れた。グーリーマルグでの勝利の後、ミールザー・ハイダルはマリク・イーディー・ライナとフサイン・マーグリーとの完全なる協力、十分な共同体制を敷いた。ミールザー・ハイダルによるこの支配と占有にもかかわらず、ナズク・シャーの支配する間、王権の名、支配権の名は彼であることが明らかであった。何度かデイルハムとディーナールも彼の名で打刻されており、ミールザー・ハイダルはデイルハムとディーナールに自分の名を打刻することができなかった。

ヒジュラ暦 951 年ジュマーダー第 2 月 23 日/1544 年 9 月 11 日、マリク・カーギー・チャクはヒンドの DANH KLH<sup>79)</sup> 近くで熱と震えを伴う病のために死んだ。「軍隊長の死<sup>80)</sup>」というフレーズが彼の死のクロノグラムとなった。明確にチャク氏族の帝王であったこの反抗的な軍隊長の死のために、彼らの部族・氏族の間に対立と不和が生じた。

ミールザー・ハイダルは占有の手を [スナ派への] 狂信による圧制という袖 (f. 111b) から伸ばし、神の使徒のお家の人々を愛する者たちや、神の友たるアリーの信奉者たちに対して、敵意を表明した。[彼の] 敵意の極み、[スナ派への] 狂信の限界は、これほどの行いをするまでに至った。すなわち、アミール・シャムスッディーン猓下の祝福されたハーンカーの破壊と損壊を命じ、そしてイスラームとイーマーンの民を殺害すること、信念を持った人々の息の根を止めることへと、謀反の手を伸ばした。ヒジュラ暦 955 年ズルヒジャ月 8 日/1549 年 1 月 8 日、リーシー猓下が殉教させられた。

ヒジュラ暦 956/1549-50 年にミールザー・ハイダルはチベットに行き、シャイフ・ダーニヤール猓下を捕らえ、[カシミールへと] 連行した。猓下を約 1 年間拘束し、幽閉した。様々な拷問を行い、約 1500 アシュラフィーの金貨が彼から没収された。最終的にアブドゥッラシード・ハーンからの侮辱をなくし、呪詛を打ち消すため、猓下の殺害と処刑を企図した。そしてシャイフ・ファトフラーを自身の前に連れてきて、嘘の証人たち (f. 112a)、偽の目撃者たちを [手配するよう] 彼に求めた。かの神を恐れない者は、金をちらつかせて賄賂を与え、正道を外れた者たち、不信仰者たちの一団を連れてきた。彼らは聖法に則った裁判において、その証言が受け入れられず、その言葉に高潔さの基礎が [あると] 聞き入れられないことがないような者たちだった。ファトフラーは彼らに教え込ませて、彼らのうちの一部分が、猓下が異端であることについて証言し、一部の者たちが証人たちの清浄さを保証する者となった。

猓下はヒジュラ暦 957 年サファル月 24 日/1550 年 3 月 14 日に、当時のカーディーたち、

79) 北緯 33 度 26 分、東経 74 度 1 分に位置する Dana のことであろうか [Bates 1873: 172]。

80) FWT SRDAR=80+6+400+60+200+4+1+200=951

すなわちカーディー・ハビーブとカーディー・イブラーヒームとカーディー・アブドゥルガッファールの法規に関する宣告のもと、殉教させられた。一部の献身的な者たちは猯下の殉教の年について、「カルバラーの荒野<sup>81)</sup>」というクロノグラムを残している。その日の夜に、猯下に心服していたある者が、その虐げられた殉教者の祝福された首を持ち去り、隠した。翌日別の心服していた者が、船でやって来て、猯下の胴体を持ち去り、ある場所に埋葬した。ミールザー・ハイダルが殺された後、猯下の具現である肉体と、祝福された首は共に集められて (f. 112b), アミール・シャムスッディーン・ムハンマド・イラーキー猯下の墓のキブラを示す場所に、猯下を1度出したのち、[一緒に]埋葬された。

驚くべきことは、ミールザー・ハイダルは猯下を殺すにあたって、自身の王権に対する良策を考慮していたということである。猯下の処刑について議論している日々の中で、ムッラー・アブドゥッラーは慎重な方法で、殺害を禁じるべきと表明した。ミールザー・ハイダルは彼への返答として、「余は王国への良策、国運と自身の支配権の永続を、彼の殺害に見出している。ラシード・ハーンの中傷による非難の払拭、汚名の返上のために、彼の処刑と殺害を実行しなければならない」と言った。実際のところ、猯下の道理に叶わぬ殺害、潔白な者の処刑は、ミールザー・ハイダルの国運の衰微、王権と支配権の荒廃の原因となったのである。

【ミールザー・ハイダルの死について】 ff. 115b-116b

(f. 115b) その頃、ミールザー・ハイダルは自身の支援者たち、相談役たちと議論し、妻たちや女性たちを守るためにモグールの一団をアールドロータコートに残して、騎兵約1000人とカシミール人の一団を同行させて、カシミールの軍営へと向かった。以下のことを知れ。主の運命、讃えられるべき者(神)の天命に従って、ミールザー・ハイダルの国運・幸運はこのとき去ってしまっていた。彼の軍隊はカシミール近郊の行く場所行く場所で敗北を喫し、敗走した。その中には、彼の大アミール (umarā'-yi 'izām) であったムッラー・カースィムとムッラー・バーキルも含まれていた。2人はチベット地方を支配していたのだが、冬の寒さが厳しい時期に、チベットの人々が団結して、ムッラー・カースィムを他の多くの者たちとともに殺した。ムッラー・バーキルは逃亡し、ミールザー・ハイダルがアールドロータコートから出発するときに、彼の御前にやって来た。そしてこの情報もまた、[彼の]悲嘆の原因を増やすところとなった。マウラーナー・アブドゥッラー・サマルカンドイーもミールザー・ハイダルが信頼を置くアミールの1人であったが、彼もバクリーの支配から逃れていた。彼もまた敗北を喫しており、ムハンマド・コートの情報を聞いて、彼は不安に (f. 116a) なりながらも、カシミール方面へ向けて出発した。パーラムーラのカスバの近くに到着したとき、彼もまた何人かの神を畏れない者たちの手に落ち、そこで殺された。

81) DŠT KRBLA=4+300+400+20+200+2+30+1=957

ミールザー・ハイダルは〔スリナガルの〕まちに到着して、彼の殺害の情報を聞いた。これもまた彼の心の悲嘆を増大させた。

苦悩の叫び声と蒼天の圧制は 何者をも繰り返し掴んで離さない  
心が悲嘆にくれるとき いつだって更にその百倍の悲嘆が降り注ぐ

ミールザー・ハイダルはそのような荒れ狂う悲嘆、その種の悲しみの蓄積にもかかわらず、次第にカシミール人たちの方へと近づいていった。そして WHANWR 村<sup>82)</sup>の近くに野営した。カシミール人の軍隊もまたその近くに来て、ハークプラ (Hānkpūr)<sup>83)</sup> のカスバの近くにあるマールノの城砦にとどまった。ミールザー・ハイダルは望ましい理性と見解を持ち合わせた、ベテランのアミールたちと、カシミール人たちとの戦いについて相談した。彼らの相談と方策は以下のように定まった。すなわち、彼らに対して夜襲を仕掛けるべきである。というのも彼らが油断しているときならば、有効打を加えることができる、と。最終的に、カシミール人たちの軍隊がその城砦に留まっていた当日の夜、ミールザー・ハイダルは約 700 から 800 人の十分に装備を整えた騎兵とともに (f. 116b)、彼らの許へと急襲した。城砦の麓に到着したときには、ミールザー・ハイダルについて城砦の麓まで来ていたモゲールたちはもはや 30 人にも満たなかった。その中からも、道中で留まる者が現れ、ミールザー・ハイダルは 7、8 人を同行させて戦場に臨んだ。神の天命により、その夜、すなわち、ヒジュラ暦 957 年ズルカアダ月 8 日の夜、ミールザー・ハイダルはカマール・ドゥーニーの槍の傷がもとで死に至った。彼らの軍隊の残ったものたちはみな逃亡して、アールドロータコータに到着した。ミールザー・ハイダルのカシミールにおける統治期間は 10 年であった。

### Ⅲ カシミール史料に独自の情報

邦訳の提示に続いて、カシミール史料からどのような独自の情報を見いだせるのか、その情報がミールザー・ハイダルの生涯を研究する上で、如何なる貢献を果たすのかを見ていこう。

#### 1 1532-33 年の遠征について

ミールザー・ハイダルの 1 度目のカシミール遠征について、シュカはサプタルシ暦 [46] 08 年のマールガシールシャ月 (1532 年 11 月 22 日頃-12 月 21 日頃) に、モゲールの軍勢がカシミールに到来したと記している [ŚRT: 2. 59]。TR によると、モゲール軍がゾジ・ラ

82) TSA の WAHH TR の書き損じと思われる。

83) ハーンプルのことであろう。

峠<sup>84)</sup>を越えたのは939年ジューマダー第2月(1532年11月29日-12月28日)の初頭とあり [TR: 617], 両者の記録はほぼ一致している。また, モグール軍がラダック方面に帰還した時期についても, シュカは [46] 09年のジューシタ月(1533年5月21日頃-6月21日頃) [ŚRT: 2.87], TRは939年のシャウワール月(1533年4月26日-5月24日)終わり頃としている [TR: 636]。こちらも両者の記録は一致しており, モグール軍は1532年11月末-12月初頭にカシミール盆地に侵入し, 1533年5月21日から24日の間に帰還したことが確認される。

カシミール盆地に侵入後, ミールザー・ハイダルはしばらくの間ラージダーン (Rāgdān) と呼ばれる場所<sup>85)</sup>に滞在している [TR: 629]。シュカは, このラージダーンに同定されるスリナガル市域のザイナナガルに, 結局モグールたちが火を放って燃やしてしまったという, TRにはない情報を伝えている [ŚRT: 2.67]。また, モグール軍とカシミール人の軍が1533年の初春に戦闘を行った場所について, ミールザー・ハイダルはTRのなかで言及していない<sup>86)</sup>。しかしシュカによると, マールタンダ<sup>87)</sup>の麓で両軍は衝突したという [ŚRT: 2.77]。これは正しくカシミール盆地南部のアナントナグから東に5 kmほど, レーダリー川の左岸に広がる幅の狭い平野にあたる。この記録から, モグール軍がカシミール盆地の中で移動した経路を大まかに復元できる。すなわち, 1532年の秋にゾジ・ラ峠を通過してラールからカシミール盆地に入ったモグール軍は, はじめスリナガルに入り, そこからチャードウーラ, ナーガームを経由しつつ徐々に南下していき, 翌33年の3月1日にマールタンダの麓でカシミール軍と戦闘を行い, 勝利を収めた。そしてシャーミール朝と和約を結んだ後, サイド・ハーンの許に帰還した, ということになる。

モグール軍とカシミール軍の戦闘について, TRはシャアバーン月4日 (rūz-i čahārum az mäh-i ša'bān) という日付を記録し, ある有徳者 (yaki az fuḍalā') がこの日付にクロノグラムを見出したことに短く言及している [TR: 632]。17世紀第一四半期の史料であるBSは, その前後の状況を詳細に伝えている。それによると, ミールザー・ハイダルがサイド・ハーンの許に戦勝の報告を送ったところ, サイド・ハーンの許にいたあるカーディーがこのクロノグラムを組み込んだ詩を詠み, ミールザー・ハイダルに返送したという [BS:

84) ラダックからカルギルを経てカシミールに通じる道の中途にある峠のこと。北緯34度16分44秒, 東経75度28分19秒に位置し, 標高は3,528 m。

85) TRの別の箇所では, シャーミール朝第8代スルターン, ザイヌルアービディーンによって建造されたまちと記している。ミールザー・ハイダルはラージダーンという名をカシミールの言葉と推定したが, これは「王宮」を意味するサンスクリット的一般名詞 rājadhāna のことだろう。

86) ただし, その直前にモグール軍が通過した場所として, ミールザー・ハイダルはナーガームと ĠARWDH という2つの地名に言及している [TR: 632]。ナーガームは北緯33度55分32秒, 東経74度47分31秒に現在もあるまちで, ĠARWDHはナーガームのすぐ北にあるチャードウーラ (Čādūra) のことであろう。

87) カールコータ朝の王, ラリターディティヤ・ムクタービーダ (r. 724-60) が建立したスーリヤ寺院のこと。北緯33度44分45秒, 東経75度13分13秒に位置する。

101a]。この詩が実際にサイド・ハーンの許にいたカーディーが詠んだものなのかは不明だが、BSの著者はTRの記事に基づき、このクロノグラムを巡る話を挿入したものと考えられる。

## 2 ヌールバフシーヤとの関係について

ミールザー・ハイダルはTRにおいてヌールバフシーヤに対する非難に一節を設けており、その中でこの宗派の異端性や、開祖ムハンマド・ヌールバフシュが著した法学書『最も広範なる法学 *al-Fiqh al-Ahwat*』をヒンドウスターンのウラマーに送付し、同書を異端と認定するファトワーを受け取ったことを記している [TR: 627-28]。ミールザー・ハイダルはバダフシャーンで既にヌールバフシーヤのシャイフたちに会っていたこと<sup>88)</sup>を伝えるものの、『最も広範なる法学』をどの時点で入手したかは明らかにしていない。

TSAによると、1540年にアブダール・マーグリーらカシミールの有力氏族の一部が派兵を求めてラホルのフマーユーン宮廷を訪れた際に、アブダールの孫サイド・アフマドが『最も広範なる法学』をフマーユーンの臣下に差し出し、これがミールザー・ハイダルのカシミール遠征につながったという。とすると、ミールザー・ハイダル2度目の遠征は、異端信仰に対するジハードという目的を当初から持っていたことになる。

カシミールの支配権掌握後にミールザー・ハイダルが執った苛烈な住民のスナ派化政策や、ヌールバフシーヤのシャイフの処刑などに関するTSAの記事は、TRやヌールバフシーヤ側の史料である *Tuḥfat al-Aḥbāb* の記事とも一致するところが多い<sup>89)</sup>。独特の情報を伝えるのはBSで、特に注目すべきなのは以下の2点である。1) 1541年の権力掌握後も、しばらくの間は盆地内に安定した権力基盤を築いておらず、ミールザー・ハイダルは在地有力者のリーギー・チャクに頼らなければならなかった。リーギー・チャクが親ヌールバフシーヤであったため、ミールザー・ハイダル自身も外面上ヌールバフシーヤのシャイフに対して敬意を示していた。2) シャイフ・ダーニヤールの処刑を含むヌールバフシーヤの弾圧の背景には、自身のスナ派への志向のみならず、当時モグーリスターン・ハーン国を支配していたアブドゥッラシード・ハーン ('Abd al-Raṣīd Ḥān, r. 1533-59/60) からの非難を逃れる目的もあった。

まず1)については、同時代史料であるBも、1541年に支配権を掌握してからカーギー・チャク (Kāḡī Čak) が没するまでの間、ミールザー・ハイダルの権力基盤がなお安定していなかったことを示唆している [B: 1-3]。TAによれば、リーギー・チャクは950/1543-44年にミールザー・ハイダルと不和になったためにカーギー・チャクと合流し、

88) 914-15/1508-09年のことであろう。

89) *Tuḥfat* によれば、ザディーバルに建造されたヌールバフシーヤのハーンカーは、954/1547-48年にミールザー・ハイダルによって破壊された。またハーンカーの中に置かれていた高価な物品はアールドロータコータに持ち去られたという [*Tuḥfat*: 395]。

ミールザー・ハイダルに戦いを挑むものの敗北した。その後カーギー・チャクとリーギー・チャクは相次いで死去している [TA: 3, 469]。ミールザー・ハイダルが TR 第 2 部を完成させたのが 948 年から 950 年の間のことなので [間野 2016: 132], 仮に 950 年にリーギーが離反したのち、ミールザー・ハイダルが TR 第 2 部のヌールバフシーヤを非難する箇所を書き上げ、またカシミール住民のスナナ派化政策を開始したと考えると、時系列上はぎりぎり辻褄が合う。

続いて 2) については、確かにアブドゥッラシード・ハーンは即位後程なくしてミールザー・ハイダルのおじであるサイド・ムハンマド・ミールザーやハーン自身の近親者を相次いで処刑しており、ミールザー・ハイダルがモグーリスターン・ハーン国を離れる原因になった。BS の記述は、ミールザー・ハイダルがカシミールの支配権を掌握した後もなお、アブドゥッラシード・ハーンから異端認定され、またそれを口実としてモグーリスターン・ハーン国の軍がカーシュガルからカシミールに攻め込む可能性があったことを示唆しており興味深い。この記述を即座に史実として受け入れることはできないが、少なくとも 1610 年代のカシミール人が、ミールザー・ハイダルが当時置かれていた立場を、そのように理解していたことが分かる。

### 3 没年について

先行研究では、ミールザー・ハイダルの没年を 1551 年とすることが定説になっているが、死亡時期を伝える同時代史料が直接参照されているわけではない。間野英二が指摘しているように、TA にはミールザー・ハイダルが最後の攻撃に向かう直前の記事で、958 年ラマダーン月 27 日/1551 年 9 月 28 日という日付が記録されている。先行研究はここから死亡時期を推定したものと考えられる [Haidar 2002: 104; 間野 2016: 149, n. 27]<sup>90)</sup>。しかし、TSA と BS はミールザー・ハイダルの命日を 957 年ズルカアダ月 7 日から 8 日にかけての夜/1550 年 11 月 17-18 日と共に明記しており、現在の学説の典拠となっている TA の日付よりも 1 年早い。その前の記事を見ると、カーギー・チャクが死亡した年を TA は 952 年 [TA : 3, 469], TSA と BS は 951 年としており [TSA : 34; BS : 111a]<sup>91)</sup>, カシミール史料とムガル帝国で編纂された史料の間では、この時点で既に紀年が 1 年ずれていた。それ以前の出来事では、948 年にミールザー・ハイダルがスール朝の軍を破ったことを、TA と BS が「繰り返される勝利 fath-i mukarrar」という同一のクロノグラムを引用しつつ言及しているので [TA : 3, 468; BS : 108a], ここではまだ紀年のずれがなかったことが分かる。TA には 949 年の記事がないので、ここで紀年が 1 年ずれた可能性があるが、検証するための史料を欠くため、現時点で結論を出すことはできない。いずれにせよ、ミールザー・ハイダル

90) なお、AN も 958 年にミールザー・ハイダルが没したと記している [AN: 199]。但し日付に関する情報は無い。

91) BS によれば、ジュマダー第 2 月 23 日/1544 年 9 月 11 日に没した。

と直接面識があった人物によって記された、957年秋に死亡したという情報は、今後慎重に検証されるべきである。

## おわりに

本稿で訳出した4つのカシミール史料の記事から、TAをはじめとするムガル帝国やデカン・ムスリム政権で編纂されたペルシア語史料には見られない、いくつかの新たな情報を得ることができた。

まず1532-33の遠征に関しては、モグールがカシミール盆地内で移動したルートや、カシミール人の軍と戦闘を行った場所をSRTが伝えており、TRの記述を補っている。また1541年以降の約10年間の統治期間については、Bがモグールによる文書の発行を通じた土地の収用を伝えており、TSAとBSはミールザー・ハイダルがTRの中でも言及しているヌールバフシーヤの弾圧と住民のスナ派化の詳細を伝えている。そしてTSAとBSはまた、1550年11月にミールザー・ハイダルが没したという、先行研究の通説よりも1年早い没年を伝えている。総じてカシミール史料は、ミールザー・ハイダルの生涯をより詳しく見ていくうえで重要な素材を提供するものである、と言えよう。

最後に、カシミール史料はミールザー・ハイダルをどのような存在として記録したのかを考えてみたい。シュカはモグールの到来を災厄ととらえ、彼らがスリナガルを蹂躪する様や、カシミール人との戦いを描写している。モグールの軍隊長としてのミールザー・ハイダルへの言及はあるものの、彼のパーソナリティに対する関心は希薄である。一方ミールザー・ハイダルのカシミール統治を記録したBの著者は、ミールザー・ハイダルとチャク氏など在地有力氏族との微妙な権力関係に触れており、この関係は後代の史料であるBSでより詳細に語られることになる。サイイド・アリーとBSの著者はミールザー・ハイダルをスナ派の熱烈な護持者として描き、シャイフ・ダーニヤールの処刑を含むヌールバフシーヤに対する苛烈な弾圧が、自らの破滅を招いたことを伝えている。サイイド・アリーはスナ派の護持者という点でミールザー・ハイダルと立場を同じくし、一方BSの著者はヌールバフシーヤへのより同情的な立場からミールザー・ハイダルの施策を批判的に評価したという違いがあるものの、彼の宗派性を強調しているという点で、2つの史料の記述は一致している。旧稿で邦訳を提示したEと今回紹介した4つの史料との記述の上での大きな違いは、Eがミールザー・ハイダルの文人としての側面にも光を当てているのに対して、SRT、B、TSA、BSはいずれもミールザー・ハイダルの軍人、ないしスナ派ムスリムとしての側面のみに注目している点である。16世紀後半から17世紀前半にかけてのカシミールでは、ヌールバフシーヤ・反ヌールバフシーヤを中心にイスラームの宗派を巡る対立が未だ顕在的であり、その対立の中でミールザー・ハイダルがスナ派の護持者として注目されたのは、自然なことであろう。

ミールザー・ハイダルの文人としての面や、彼の学芸保護を綴る史料がカシミールで再び現れるのは、BSの編纂からおよそ1世紀を経て、シャー・アラム1世 (Šāh 'Ālam I, r. 1707-12) の時代に至った1710-11年のことである。当時カシミール州 (šūba) にナーイブとして着任していたアーリフ・ハーンという人物に命じられて、TNKを編纂したヒンドゥー書記 (kāyastha) のナーラーヤン・カウルは、ミールザー・ハイダルが職人や技芸を持つ者をカシミールに呼び寄せて厚遇したこと、特に音楽を奨励して楽器を取り寄せたことを綴り、カシミールの文化伝統の発展にミールザー・ハイダルの貢献があったことを語っている [TNK: 79a-b]。アクバル時代からアウラングゼーブ時代までのカシミールには多くの作家や詩人が訪れ、盆地はバルシア語文学において地上の理想郷として描かれていた [Sharma 2017]。そのような時代を経て、ミールザー・ハイダルの文人としてのイメージがカシミールにおいて再び顕在化したとも考えられる。この点については、機会を改めて考察したい。

[追記] 本稿は科学研究費補助金 (18H00723) による成果の一部である。

## 参考文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*, 2 vols. H. Blochmann (ed.), Calcutta, 1872-77.  
 AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāma*, 3 vols. Ā. A. 'Alī and 'Abd al-Raḥīm (eds.), Calcutta, 1877-87.  
 B: Anonymous, *Appendix B to the Rājatarānginī of Śuka*, in *Rājatarānginī of Śrīvara and Śuka*. S. Kaul (ed.), Hoshiarpur, 1966.  
 BS: Anonymous, *Bahārīstān-i Šāhī*. British Library, India Office Islamic, No. 943.  
 E: Anonymous, *Appendix E to the Rājatarānginī of Śuka*, in *Rājatarānginī of Śrīvara and Śuka*. S. Kaul (ed.), Hoshiarpur, 1966.  
 GI: Muḥammad Qāsim Astarābādī, "Firišta", *Gulšan-i Ibrāhīmī*. N. Kishor (ed.), Kanpur, 1874.  
 JRT: Jonarāja, *Rājatarānginī*. In: Slaje 2014.  
 KK: Śrīvara, *Kathākautuka*. R. Schmidt (ed. and tr. into German), Kiel, 1898.  
 KRT: Kalhaṇa, *Rājatarānginī*. M. A. Stein (ed.), Westminster, 1900.  
 ŚRT: Śuka, *Rājatarānginī*, in *Rājatarānginī of Śrīvara and Śuka*. S. Kaul (ed.), Hoshiarpur, 1966.  
 ṬA: Nizām al-Dīn Aḥmad Harawī, *Ṭabaqāt-i Akbarī*, 3 vols. B. De and M. H. Husain (eds.), Calcutta, 1913-41.  
 TNK: Nārāyan Kaul, *Tārīḥ-i Kašmīr*. British Library, Add. 11, 631.  
 TR: Mīrzā Muḥammad Ḥaydar Duḡlāt, *Tārīḥ-i Rašīdī*. 'A. Ġ. Fard (ed.), Tehran, 2004.  
 TSA: Sayyid 'Alī, *Tārīḥ-i Kašmīr*. Z. Jan (ed. and tr. into English), Srinagar, 2009.  
 TSA\_ms: Sayyid 'Alī, *Tārīḥ-i Kašmīr*. Oriental Research Library, Department of Libraries and Research of the Government of Jammu and Kashmir, Persian 739.  
 Tuḥfat: Muḥammad 'Alī Kašmīrī, *Tuḥfat al-Aḥbāb*. Private collection of Pīr 'Awn 'Alī Šāh, Ḥaplū.

- ZRT : Śrīvara : *Zaynatarangīnī* and *Rājatarangīnī*, in *Rājatarangīnī of Śrīvara and Śuka*. S. Kaul (ed.), Hoshiarpur, 1966.
- Bates, Charles Ellison (1873) *A Gazetteer of Kashmir and the Adjacent Districts of Kishtwar, Badrawah, Jammu, Naoshera, Poonch, and the Valley of the Kishen Ganga*, Lahore, 2012 (Reprinted).
- Dutt, Jogesh Candra (1898) *Medieval Kashmir : Being a reprint of the Rajataranginis of Jonaraja, Shrivara and Shuka, as translated in to English by J.C. Dutt and published in 1898 A.D. under the title of "Kings of Kashmira"*, vol. III. ed. with notes, etc., by S. L. Sadhu, Delhi, 1993.
- Haidar, Mansura (2002) *Mirza Haidar Dughlat as depicted in Persian Sources*. New Delhi.
- Kak, Ram Chandra (1932) *Handbook of the Archaeological and Numismatic in Kashmir*. Srinagar, 2009 (Reprinted).
- Ogura, Satoshi (2010-11) Transmission lines of historical information on Kaśmīr: From Rājatarangīnis to the Persian chronicles in the early Mughal period. *Journal of Indological Studies* 22&23, pp.23-59.
- Ogura, Satoshi (2018) Persian Historiography of Kashmir during the Ġahāngīr Period I : the *Intihāb-i Tārīḥ-i Kaśmīr*, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 96, pp.145-293.
- Rodgers, Charles James (1885) The Square Silver Coins of the Sultans of Kashmir. *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 54/1, pp.92-139.
- Ross, E. Denison (1898) *A History of the Moghuls of Central Asia, being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlát*, Ney Elias (ed.), London.
- Sharma, Sunil (2017) *Mughal Arcadia : Persian Literature in an Indian Court*, Harvard.
- Slaje, Walter (2014) *Kingship in Kaśmīr (AD 1148-1459) : From the Pen of Jonarāja, Court Pañdit to Sultān Zayn al-'Ābidīn*, Halle.
- Stein, Marcus Aurel (1900) *Kalhana's Rājatarangīnī : a chronicle of the kings of Kaśmīr*, 2 vols. Westminster.
- 大塚修 (2016) 「『集史』の伝承と受容の歴史：モンゴル史から世界史へ」『東洋史研究』75/2, pp.347-312.
- 小倉智史 (2015a) 「中世後期・近世カシミールにおける支配の正統性と宗教アイデンティティ」今松泰・澤井一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相』京都大学イスラーム地域センター。
- 小倉智史 (2015b) 「15-16世紀スリナガルのハーンカーヒ・ムアッラー」『駿台史学』154, pp.51-90.
- 桑山正進編 (1992) 『慧超往五天竺國傳研究』京都大学人文科学研究所。
- 間野英二 (2016) 「ミールザー・ハイダルの生涯と彼のバダフシャーへの旅」守川知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会。